児童の知能における人格的要因の測定に関する研究*

—WISC による臨床的研究—

東京学芸大学

品川 不二郎**

I 本研究の目的

知能の因子分析に関する諸研究においては、主として知的因子 (intellective factors) の分析に主力が注がれ、G 因子、S 因子に関して論議が集中されている。そしてそれらは知能の本質をどう考えるかという立場、すなわち知能観によつてささえられているといつてよいであろう。

知能をできるだけ純粋な形において捉えたいと望む従来の考え方では、知能から生活経験や後天的学習の影響を排除しようと努める。そしてそのために知能というものを血も肉もない狭いものにしてゆく傾向がある。

そのような考え方からすれば、知能の因子を知的因子にだけ求めるようになるのが当然の成行きであろう。しかし、知能をもつと広義に解釈するならば、非知的要因 (non-intellective factors) の分析を考慮せずにはおられないのである。

特に臨床的な立場からすると、人間の全体的行動に関心を持たざるをえないし、人格理論を考慮せずにはおれないから、知能の概念を狭義の抽象的なものにだけ限つておけなくなるのである。つまり知能観を従来のものより拡大する必要に迫られるのである。そして、知能構造を考察する上に、非知的な要因を捉えずにはすまされなくなる。

ウエックスラーはアレクサンダー (W. P. Alexander) の唱えた X、Z 要因 (興味、忍耐力、成功への情熱と要

望など、すなわち気質的、人格的要因) の分析、つまり非知的要因の分析の必要性を唱えており、臨床的な立場から新しい知能観及び知能測定の方法を確立した。***

そこで本研究では教育相談における臨床的研究によつて知能における人格的要因の検討をすることとした。

II 本研究の背景

(1) 知能観について

この研究の背景をなしている知能観として、知能の定義をウエックスラーにしたがつて次のように定めておく。

「知能とは、個人が目的的に行為し、合理的に思考し、環境を能率的に扱う総合的、全体的能力をいう。』*

このように知能を考えると、それは単に記憶、推理、弁別などの狭義の能力だけでなく、行為や生活の場の世界の見透しや環境の操作にまでおよんでくるのである。しかも単に知的能力の諸要因だけの集計ではなく、それらの相互的な関聯や統合によるものであり、同時に感覚・運動・情緒・社会性などの人格の全分野にわたる活動を基盤として醸成された広義の能力と考えなくてはならない。

したがって、ソーンダイクが唱えた、抽象的知能、具体的知能、社会的知能などの分類をも含んだものとならなければならない。それは知能の内容であつて知能の純粋な機能や過程に関する分類ではないと抗議する人があるかもしれない。しかし、内容こそは知能の血であり肉であるという考え方、又は、知能の働き出した精神的産物 (Mental products) だと考えてゆこうとするのである。

知能そのものは電気のやうな一種のエネルギーで、そ

* A Clinical Study of Personality Factors in Children's Intelligence as Measured with WISC

** by Shinagawa, Fujiro (Tokyo Gakuji University)

*** D. Wechsler: The non-intellective factors in general intelligence. J. Abnorm. and Soc. Psychol., 1943, 38: 100-104

* D. Wechsler: The Measurement of Adult Intelligence. 1944 Williams & Wilkins Co.

** OP. Cit., pp. 3

のものを捉えることはできない。しかし、電気的作用によつてあらわれた結果としての、磁性、熱、化学的分解作用などによつて、電気の何ものであるか、その働きの過程と内容とが知りうるのであるとしたならば、同様のことが知能についても云いうるであろう。

このように考えれば、知能の作用する面を抽象・具体・社会というように内容的に考えることも許されるのである。そのような全体的でしかも内容的な面から知能を考えるとすれば、当然、知能における人格的要因を問題にせざるをえない。このような人格的要因は、G要因やS要因とどのような関係に立つものであるだろうか。また一般知能以外の適性、学力などどう関聯しているであろうか。

ここに云う人格的要因とは勿論一般的知能の要因として主張しているわけであつて、決して適性や学力と考えているわけではない。前述のような知能観から従来のG要因説、S要因説を批判すると、たとえばスピアーマンの二因子説にしたがつて知能検査を構成するとすれば、広義の一般知能の測定尺度としては不充分であると考えられる。人格的要因を除外したGやSの要因は、行動を律する知能とは云えない。そこで次に図示するように一般知能を考えてゆきたい。

Fig 1 一般知能の要因構成図

さて、全体的な人間行動に関聯する知能の要因として人格的要因を追加するとすれば、それはどのようなアプローチによつて追求したらよいであろうか。

これに関してウェックスラーは動作性 (performance test) を言語性 (Verbal test) に追加し、両者の総合から広義の知能を把握しようと試みたのである。

(2) 人格的要因とは

精神薄弱児の診断においてしばしば主張されることは知能のみならず社会的成熟度又は社会生活的能力を吟味しなければならぬということである。その理由は、知能指数が同一でも、子供の全人格的能力としては大きい差異があるからである。精神年齢が同一であつても、知能

の構造や生活能力には大きい差異がみられるから、実際問題としてビネー法によるだけで精神薄弱か否かを断定しえない場合がかなり起つているためである。

しかし、社会生活的能力とか社会性の成熟とかいうことは、やはり広義の知能の働きではあるまいか。単語の定義を述べたり、推理したりする能力と同様に、危険をさけたり買物をしたり忍耐強く作業を続けたりすることは、重要な能力であり、それが知能でないとみる方が不自然ではなからうか。臨牀的な立場からすると、それらも知能であると主張したいのであつて、G因子やS因子と同様に人格要因を考慮せざるをえないのである。

さて、人格要因という場合、人格をどのように考えるかによつても問題は変つてくる。人格を精神物理的な体系と見做して、次のような層においてとらえてみよう。

Fig 2 全体的知能の二大要因

人格の発達順序からみて、感覚、運動、情緒、社会性の各層を土台として、S因子、G因子を考える。上層の知的要因は言語的な抽象的知能の面を主として担当し下層の人格的要因の層は、具体的、生活的な能力を主として担当する分野と仮りに考えておこう。勿論両者は別々に作用するものではないが、その主たる機能分担を図解してみたまでである。

子供の場合、上層は抽象教科学習の面に、下層は生活学習の面に主として関聯をもつ分野である。そして下層の面の能力とは、感覚や手先の運動機能などの人格の動作面に依存し、それはさらに情緒や社会性によつて影響されているとみなければならない。

しかも、子供の人格の発達の特性からみると、人格の下層面の機能が生活能力、適応行動の面に大きい役割を占めているとみるのが至当であろう。したがつて全体的知能を把握しようとする場合には、人格的要因を無視することはできないのである。このような人格的要因の面をとらえるためにウェックスラーは動作性の知能という名をつけて、狭義の抽象的知能と区別したのである。そして狭義の知能を言語性と名づけて、言語性、動作性の名称の下に知能の要因による分析を二大群に分けたのである。

このようにして、言語性、動作性を全体的知能の両翼と考え、この両者の分析をもつて知能構造の分析と見做しているわけである。したがってこの考え方は、狭義の知的因子の中のG因子、S因子という知能構造論とは次元を異にする別個の知能構造論であるといえよう。

知能における知的要因 (intellective factor) と非知的要因 (non-intellective factor) の両翼をもつて知能の第一次構造論と名づけるならば、知的要因内のいわゆる因子分析 (factor analysis) は、第二次的知能構造論と名づけるべきものであろう。第一次的構造論はより包括的な概念であることは云うまでもない。

さて本論における人格的要因とは、この第一次構造論における一翼としての知能要因をいうのであるが、言語性と動作性の両者を更に統合した全体的な知能の水準としてそれをウェックスラーの検査では、全検査の結果としての I. Q. であらわしている。そして、言語性、動作性共に下位検査を六組づつ作成しているのであつて、それも、いわゆる因子分析的な立場からの分類ではなく、全人格的な能力のあらわれ方を捉えるのに好都合なように考案されている。つまり、人格的要因は、言語検査の中にも滲透し、逆に知的因子は動作性の面を通して表現されているとみるのであつて、このことは要因を二大別したものと矛盾するものではない。

Ⅲ 研究の手續及び方法

(1) 手続

1949 年ウェックスラーが発表した WISC* の日本版標準化を筆者らは昭和26年に着手し、それを「WISC 知能診断検査法」として昭和28年に発表した。** その後、筆者は教育相談において実際に WISC を使用してきたが、過去3カ年間に千件以上に及ぶケース・スタディーを行い、その間に、WISC によつて人格的要因の存在を確認するにいたつた。

人格的要因の表現は複雑であり、個人によつてそのあらわれ方を異にしている。したがつて、たとえば「忍耐力の強い子供」という範疇にしたがつて統計をとるだけでは、真の人格的要因の機能はとらえにくい。

したがつて本研究においては、臨床的な事例に基づいて、全人格的な要因を行動や生活の全体系列の中で機能的にとらえることを試みた。

(2) 方法

WISC (児童用, 5才〜15才適用, 個人検査) を用いて、ケースごとに子供の生活と関聯させて検討する。

WISC の詳細については述べないが、必要最少限の特徴、内容等を次に述べてみよう。

1. 言語性と動作性

前述のように、抽象的な言語的表象を取扱う分野に作用する知能を捉えるために言語性検査を、具体的な運動、感覚面を通して作用する知能を捉えるために動作性の検査を構成している。

そして問題は言語性、動作性の両面の I. Q. のアンバランスにある。従来の知能観からすれば、言語性の I. Q. に重点がおかれ、動作性の面は軽視されがちであるが、行動全体に関聯をもつ知能を考え、人格的要因を含める立場からすると、動作性の面を軽視することができない。両者を対等に認める立場に立つて両者の統合を以て全知能の水準とする。全検査の I. Q. を求めるのはそのためである。

但し、言語機能に障害のある場合や運動機能に障害のある児童の場合は例外で、障害面の欠陥をある程度考慮すべきであることはいうまでもない。

2. I. Q. の概念

言語性、動作性、全検査の三段について I. Q. を求めるのであるが、I. Q. の概念についてウェックスラーの立場の特殊性を述べておく必要がある。従来の I. Q. の概念は主としてそれが算出される仕方に重点がおかれた。即ち、精神年令と暦年令との比率ということが I. Q. 算出の規準であつた。しかし、年令が異れば S D が異なるから、単に MA と CA の比率だけでは正確さが不充分であり、厳密には異なる年令を直接比較しえない。

たとえばビネー法によれば MA 6.0 CA 5.0 の A 児と、MA 12.0 CA 10.0 の B 児とは、共に I. Q. 120 である。しかし A 児は MA と CA の差が 1 年であるのに、B 児はその差が 2 年である。つまり、 $\frac{MA}{CA}$ の計算方法による I. Q. は年令差による誤差が出てくるのである。I. Q. の真の意味は、MA と CA の比よりも、むしろ同一年令群における知能水準の統計的な位置づけにある筈である。

したがつて、すべての年令の児童を公平に比較しうる I. Q. を求めるためには偏差値を基準にして求めるべきであるということになる。ウェックスラーはこの立場から Deviation I. Q. なるものを考案し、偏差値を 100 を中心とする価であらわし、それを I. Q. とよんだ。また下位検査の得点 (Scaled Score) をも偏差値から換算して 10 点を中心とする 20 点満点であらわした。したがつて下位検査間の比較がなされると同時に異なる年令群の下位

* D. Wechsler: Wechsler Intelligence Scale for Children. 1949 Psychological Corporation.

** 児王省・品川不二郎共著：WISC 知能診断検査法 昭和28年 日本文化科学社

検査も直接比較しうる。

I. Q. 換算及び下位検査の Scaled Score の換算公式はハルの公式で次のものである。

$$X_2 = M_2 + \frac{\sigma_2}{\sigma_1} (X_1 - M_1)$$

I. Q. の場合 $X_2 \cdots \cdots$ I. Q.

$M_2 \cdots \cdots$ 100

$\sigma_1 \cdots \cdots$ 計算して求めた S D

$\sigma_2 \cdots \cdots$ 15

$X_1 \cdots \cdots$ 個人得点

$M_1 \cdots \cdots$ 平均得点(標準)

下位検査の評価点 (Scaled Score)

$X_2 \cdots \cdots$ 評価点

$M_2 \cdots \cdots$ 10

$\sigma_1 \cdots \cdots$ 標準偏差

$\sigma_2 \cdots \cdots$ 3

$X_1 \cdots \cdots$ 粗点

$M_1 \cdots \cdots$ 平均得点

3. 下位検査

言語性、動作性に属する下位検査はそれぞれ6種類があり、その各々についてそのねらいと人格的要因について簡単に述べておこう。

A. 言語性検査

1. 一般的知識 (General Information)

常識問題であり知識の量を調べることによつて知的能力を測るものである。外で遊ぶよりも家庭内で大人の話を聞いたり本を読んだりする機会の多い子供や両親の教育的関心の強い家庭の子供はこの面が比較的に高い。言語性、動作性、全検査との相関は $r = .86 \quad .58 \quad .65$ である。*

2. 一般的理解 (General Comprehension)

実際の生活場面に対する判断力と決断処置責任などをみようとするもので、一般に生活経験の乏しい子供はこの面で劣る。したがつて、たとえば戸外での生活経験の少ない子供は、一般的知識は高くても一般的理解は低いということがある。この両下位検査を比較すると被験者の人格や生活様式が診断される。過保護、溺愛で育てられた子供が動作面で成績が下降すると共に、言語面では一般的理解が低いことが多い。

3. 算数問題

数的推理の問題は通常考えられているように純粋に狭義の知能だけを測るものではない。注意の度合や情緒的な面、その他忍耐力やフラストレーション、トレランスなどにも影響されている。意志の弱いねばり強さのない

子供は全般の知能が高くても数学問題が劣ることがよくある。

4. 類似問題

論理的思考力をみるのにより問題で、従来唱えられている g 要因を多く含んでいる。そして皮相的な面と本質的な面とを量的に区別できるような採点法を採用することによつて一層その効果をあげることができる。

5. 単語問題

単語を定義させる問題で、被験者の表現が質的にもとらえられ、思考過程が明らかにされるので人格的要因がはいってくる。物事の見方考え方感じ方などが内容的に表現され、診断的価値をもつ問題である。

6. 数唱問題

数の直接記憶による順唱、逆唱であるが、比較的 g 因子が少いし、全体との相関も低い。しかし、知能水準が低い被験者にとっては識別度が高いばかりでなく、注意集中度、情緒的安定度などがとらえられる点で診断的意味のある問題である。

B. 動作性

1. 絵画完成

欠所発見のテストであり、本質的部分と非本質的部分を把握し識別する能力が検出される。しかしそこには注意散漫、生活経験の不足、観察態度、偏見、安定感の欠如などが同時にあらわれてくる。

2. 絵画配列

絵の系列を順序不同に与えてストーリーに従つて配列し直はさせる問題である。社会的事象についての全体の見透しや各場面の理解力などを試すのによいが、子供の社会性の成熟や、生活経験の広狭からくる人格の構造をみるのにもよい。

3. 積木模様

積木をサンプル模様にしたがつて組合わせる問題で、手腕運動、知覚、思考過程、部分と全体の見透しなどをみるのによい。せつかな子供、あきらめの早い子供、ねばり強い子供などの情緒的態度があらわれやすいし、手先の動きに思考過程があらわれる点に興味がある。

4. 組合わせ問題

部分から全体を構成させる問題で、構成能力、見透しなどをみるのによい。試行錯誤、知覚様式の特徴がみられるだけでなく、気質的な態度があらわれやすい点は積木と同様である。

5. 符号問題

置換作業検査で速度、正確度の両面から知覚、弁別、手腕の器用さなどがみられるが、その他に決断力、安定度、固執性などの因要がみられる。

* 児王省・品川不二郎共著 WISC 知能診断検査法 33頁 関連表参照

6. 迷路問題

この問題は全体の知能水準との相関は低いが、速度、誤謬、試行錯誤などを分析することによつて、診断的価値を高めることができる。見透しの能力、手腕技能安定度、意志の強弱、落着きの程度などの人格的要因の診断に役立つことが多い

Ⅳ 事 例

(A) 言語性が動作性より著るしく優れているもの

事例 1. 家の中だけで遊んでいる幼児で6才2カ月の男児、浅草方面のある履物問屋の長男で下に4才と11カ月の妹が2人ある。店員が4名女中が1入いて、母親は過保護で、心配で外に出して遊ばせない。幼稚園に行っているが、送り迎えをしてもらい、幼稚園ではおとなしく積極性がない。体は健康で身の廻りのこともできるし、偏食もなく、性格的には素直ほで聞きわけもよくお利口である。

この子供は文字も読めるし絵本なども自分でどしどし読みながら楽しそうに遊んでいる。情緒的には安定感もあり、家庭は経済的にもめぐまれているので、玩具なども多く、大人が話相手になつてやることが多い。特に父親はよく子供の遊び相手になつてやる。

この子供の WISC のプロフィールは Fig 3 の通りである。

言語的な面では最優であり、特に類似性の問題が高得点で推理能力が高い。しかし、運動機能、感覚的機能を通して働く具体的な生活能力的な面では中程度にしか伸びていない。これは親の過保護からくる消極的性格のもたらすものと考えられるであろう。しかし全体的に下位検査間のひどい動揺はみられず、比較的安定した能力の表現がみられる点は、愛情面で満たされて情緒的に安定していることに関係があろう。いわゆる典型的なお坊ちゃん型で秀才タイプであるが、動作性があまり伸びていないから、全体的水準としては最優ではない。このタイプの子供は学校での抽象教科はかなり高くて

Fig 3 事例 1. プロフィール (6才2カ月男児)

Fig 4 事例 2. プロフィール (8才1カ月男児)

Fig 5 事例 3. プロフィール (7才5ヶ月男児)

Fig 6 事例 4. プロフィール (6才6ヶ月男児)

も、友人関係や生活的能力、適応性などの面での人間的抵抗力の少ないタイプである。

事例 2. 大人とはうまくゆくが子供同志とはうまくゆかない小学二年生学業成績のよい臆病で引込思案の子供。近所の友だちとも遊ばずおつかいにも行かないで、もつぱら家の中で本ばかり読んでいる。身体を動かす活潑なことは何もせず、母親は過保護で教育熱心である。家は来客が多く、男よりも女が多い。(同居の叔母はピアノの教師)。そこで大人の人との話とはうまく合い可愛いがられており、秀才と認められていて、言葉も子供らしくない。(父親は著述業であるが目下療養中)

最近学校でB式(集団)知能検査があり、その結果は中程度であつたので教師も母親も不思議に思っているという。WISC ではFig 4 のようであつた。

つまりこの子供の知能構造は極端に言語性に傾いているということであり、運動機能を通してあらわれる面、特にスピードを重んずるB式では本人にとって不得意な面であるということである。

一人つ子でスローモーションであるという日常生活の様式がテストにもあらわれており、生活能力——子供の社会生活における——の低さを示している。言語性が著るしく高いために全体としての水準は最高であり、学業成績の高いのは当然であろう。

事例 3. 祖母の溺愛で育ち過保護の母をもつ神経質な一人つ子

小学校一年生で7才5カ月の男児で、過度に潔癖で神経質で、たとえば算数など家でやれば出来るが学校で試験の時は駄目である。人に馴れるのに時間がかかり、最近まであまり外で遊んだことがない。祖母が盲愛で育て父が死亡したあと薬剤士の母親が自宅で薬局を開業しており、いちいちやかましく心配している。

母親の目からみると頭はよいと思うのに学業が中程度で不満足である。あきつぱく注意散漫で甘えん坊でなげやりで神

経質で困るというのである。この子供の WISC は Fig 5 の通りであった。

この子供の動作性が中下であるという点で低学年の学習が期待通りに営まれない原因がうかがわれる。溺愛と過保護で育った神経質で気の弱い子供は、動作面での活動が制限されて、この子供の場合には、エネルギーが神経の末梢に用いられて、ノイローゼの傾向を示している。全体の水準が中であるから中程度の成績で丁度よいわけであるが、社会性が伸び運動するようになれば、言語性の高さのために、高学年になれば中上まで伸びてく子供であろう。

(B) 動作性が言語性よりも優れている場合

事例 4. はきはきものの云えないが外でばかり遊んでいる子供

幼稚園に行っている 6 才 6 カ月の男児。小さい時から家にいたがらず外でばかり遊んでいたが、人の顔色をうかがう気の小さい処があり、明るさのない子供である。5 才になる弟があり、母親が口やかましく厳しいわりに放任的である。そのため幼稚園でも人前で話もできずハキハキしないで困るという。WISC の結果は Fig 6 の通りである。

放任されて大人が面倒みていないため、一般的知識や単語の問題が特に低い。数唱の低さも安定感の不足を物語っている。動作の面でも動揺が多く高低の差が甚だしい。このことが言語性中下、動作性中上という大きいアンバランスを起こしており、全体としては中のレベルであるが、このタイプの子供の学業成績は中程度まで上らないのが普通である。

事例 5. 言語不明瞭で学業不振の子ども

8 才 2 カ月の小学校 2 年生の女児。学業がひどく不振で精神薄弱ではないかという母親の不安で来談したもの。テスト時における反応も仲々聞きとり難いところがあり、引込思案で孤独で劣等感をもっている。そして問題解決の意欲がみられない。しかしテストではかなり努力し

Fig 7 事例 5. プロフィール (8 才 2 ヶ月女児)

Fig 8 事例 6. プロフィール (5 才 9 ヶ月男児)

Fig 9 事例 7. プロフィール (6才4ヶ月男児)

Fig 10 事例 8. プロフィール (9才6ヶ月男児)

ている点がみうけられた。WISCの結果は (Fig 7) 言語性中下, 動作性中, 全検査中下である。しかし言語性は境界線級に近い程度であるから, 学業不振はある程度やむをえないと思われるがむしろ言語不明瞭からくる劣等感によるものが大きいであろう。一般的知識と一般的理解の面が顕著に低い動作面は中であるから, 精神薄弱では絶対でない。生活能力面で自信をつけさせる道がひらかれているといえよう。

事例 6. 口の重いテストをきらう内気な子ども

5才9カ月の男児, 口が重く引込思案で3度目の来訪でやつとテストの受けられた子供。従兄といつも庭の中だけで遊び他所の子供や他所の人との接触の少い内気な子どもとして育てられた。生活習慣は早くから自立し, 一人遊びを盛んにやっていた。内弁慶で幼稚園では歌やお話はしない。WISCの結果は (Fig 8) 言語性中, 動作性優であり, 全検査中上である。家庭内での遊びばかりで外の子供と遊んでいないために, 生活経験の範囲が狭いことが一般的理解や単語問題が顕著に低いことにあらわれている。ただし, この子供の言語性の能力は, テスト場面で充分表現されていないとの疑問があるから, その点ではこの面を過小評価してはなるまい。

(C) 性格にムラのある子供のプロフィール

事例 7. 乱棒で落着きのない子供

6才4カ月の幼稚園の男児, 二人の兄が成績もよくおさえられている。父は医師でよく子供をどなり, 母親は口やかましい。幼稚園では落着きなく協調性がないが, 友だちとはよく遊び手工がすきで創造性が豊かである。おつかいにもゆけるし能力は高いようだが性格にムラがあるという。WISCの結果は Fig 9 の通りで, 高い成績と低い成績との差が甚だしく, ムラな性格をあらわしている。

事例 8. 授業中じつとしていない反抗的な子ども

9才6カ月の小学校3年生の男児で、学業成績にムラがあり友だちにも教師にも反感をもっており、家庭でも批判的反抗的である。学区外の学校に通っているため、近所の子供は遊んでくれず、いじめられるので、帰宅すると本ばかり読んでいる。

負けず嫌いで、授業中も手先のいたずらばかりしてちよこちよこして落着かない。夜尿の出ることもある。受持の先生は僕を叱つてばかりいるし、友達に僕を白い目でみるから、誰とも口をきかないのだと自分で云っている。情緒的にもやや不安定、未成熟で神経質で、泣いたりすねたりすることもある。

この子供の WISC の結果は、(Fig 10) かなり高い知能であることが分つたが、かなりムラがあらわれている。特に数唱は顕著に低い。

(D) 低知能の子供

事例 9. 仕事が永続せず一人ぼっちになりやすい子供

8才3カ月の2年生の男子で学校のB式集団検査では偏差値が20で最劣であった。物事に飽きやすく意欲的でなく引込思案の学業不振児である。21才になる兄は大学生で年の違う末子として祖母が可愛いがつて育てた。家庭は教育熱心で父親は真面目な銀行員である。

WISCの結果をみると、(Fig 11)言語性は中動作性が劣(境界線級)でひどく低い。そのために全体としてのレベルは中下程度である。生活意欲や社会性の面で劣っているために学業不振や飽きやすい状態になっているものと診断される。常識や数唱面では中よりも優れた成績をとっているが、生活場面の判断の一般的理解が劣っている点は、子供の生活能力や経験の低さをあらわしている。指導上の可能性はある子供である。

事例 10. 脳性麻痺の子供

5才11カ月の男子、脳性マヒのため運動機能の方が侵されている。食事はまだ一人で食べられず依頼心も強いが外で遊ぶことはできる。鉛筆をもつ手がぎこち

Fig 11 事例 9. プロフィール (8才3ヶ月男児)

Fig 12 事例 10. プロフィール (5才11ヶ月男児)

Fig 13 迷路テスト

なく上の図のようにふるえている。したがって WISC では、符号問題と迷路問題が特に低い。動作は全体として精神薄弱級であるが、言語性の面は大体中下であり、全体のレベルは境界線級である。

脳性マヒの子供では、言語障害と運動機能障害を起しやすいが、その程度が WISC によつて測定しうる。(Fig 12)

事例 11. 赤ちゃん扱いで育つた子供

幼稚園の6才0カ月の男児、就学延期すべきかどうかについて来訪した子供。両親が年をとつてから生れた一人つ子で、幼稚園入園まで御飯も食べさせてもらい、着物も全部世話を焼いてもらつていて、家の中に閉じこめていた。したがつて幼稚園には入つて3カ月間は母の傍を離れることができず泣いてばかりいた。現在はかなり積極性が出てきた。話しはじめと歩行は普通よりも半年ぐらいおくれたという。

WISC によると、水準からいえば言語性、動作性、全検査ともに境界線級である。(Fig 14)

全体としての能力はかなり低いが、言語性の面ではかなり出来不出来の動揺がみられる。これは家庭における大人の影響とも考えられ、本人の精神的抵抗力の弱さともみられるであろう。いずれにしても、訓練不足という点がみられる。

事例 12. 生活力のある精神薄弱児

Fig 14 事例 11. プロフィール (6才0ヶ月男児)

Fig 15 事例 12. プロフィール (12才4ヶ月男児)

12才4カ月男子、某特殊学級にいる子供で、抽象教科学習の面ではひどく低劣であるが、生活の面ではかなり能力を発揮しており、くず鉄拾い、栗の皮むきなどによって小遣をかせいでいる。

この子供の WISC では、(Fig 15) 言語性の面は低いが、その中で一般的理解が中であり生活場面での判断力の高さを示し、動作性は I. Q. 78 (境界線) であり、絵画完成、絵画配列では大体中の能力を示している。全体としての水準は I. Q. 62 で精薄級であるが以上のようなプロフィールにおける凹凸が人格構造や生活態度と一致している。精神薄弱は大低言語性の面が劣り、動作面の方がすぐれている場合が多い。そして、もし動作性が高い場合には、全体として境界線や中下となり、精神薄弱ではない場合もありうる。そしてその場合、言語的な検査だけに依存すると仮性精薄を精薄と誤診することがある。

V 結 語

以上 WISC による児童の知能検査の結果を言語性、動作性、全検査に分け、さらにその下位検査に分けて考察し、一般知能における人格的要因の存在を指摘してきたのである。

その出発点として、知能を行動にまで拡大して考えるウェックスラーの行動説にとり、その考えにしたがって作成された WISC によつて、実際のケース・スタディーを実施したわけである。そして人格的要因が随所に表明されていることを認めずにはおられないのである。その点アレキサンダーの説を支持するものである。

そしてさらに一步をすすめて、人格を規定している環境要因としての「生育史」要因をも考慮しなければならないことを、各事例に示した。

児童が幼児期以来積み重ねてきた生育歴、親の態度、家庭の諸条件などが、事例研究の結果 WISC によつて明瞭に捉えられている。

このことを逆に考察すると、WISC によつて児童の人格の診断に資するだけでなく、児童の生育歴特に家庭における親の態度の診断をかなりの程度になしうることを発見したのである。

以上臨床診断における WISC の用途にまで触れたが、診断的利用に関する研究はここでの主目的ではなく、別の機会にゆずることとする。

D. Wechsler: Wechsler Adult Intelligence Scale.
1955 Psychological Corporation.

—1956年4月21日受稿—

ABSTRACTS

A CLINICAL STUDY OF PERSONALITY FACTORS IN CHILDREN'S INTELLIGENCE AS MEASURED WITH WISC

By Shinagawa, Fujiro

Tokyo Gakugei University

1. Purpose

This study has two main objectives:

The first is to provide some clinical data to justify Dr. Wechsler's idea of general intelligence—the behavior theory—and to prove Dr. Alexander's idea of X and Z factors—the temperamental and personality factors theory.

The second objective is to provide my own idea—the life history theory.

2. Method

After I finished the Japanese standardization of WISC in 1953, I started clinical case study of children

and analyzed more than a thousand cases.

3. Results

What I have found is as follows:

By measuring children's intelligence with WISC, we not only can find personality factors, but also can diagnose children's life histories—how children are brought up and what their parents' attitudes are like, and so on.

I have listed ten illustrative cases showing brief case histories and Verbal I.Q., Performance I.Q., Total I.Q., and Scaled-Score profiles.

FAMILY RELATIONSHIPS AND THE WAY OF CALLING EACH OTHER

By Tsuru, Hiroshi

Kobe University

This aims to grasp one phase of psychological characteristics of Japanese family life by studying how their members call each other. Six hundred pupils of the fifth year grade of elementary schools were interviewed individually, and the names by which their family members (about 3,500) call each other were recorded. The subjects had been sampled

from four districts: residential, commercial, industrial, and agricultural.

The data were first studied as a whole. Then a comparative study was made between the four groups.

General result is that the family relationships in our country are now in the process of a change—from the old feudalistic system to a modern one—